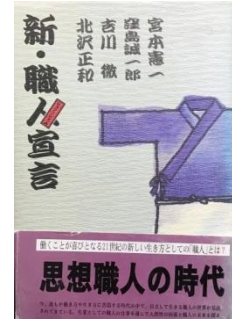


『新・職人宣言』から学ぶ

久しぶりに『新・職人宣言』1999年、ふきのとう書房を手にとった。斎藤幸平さんの『ゼロからの「資本論」』を読んでいて、この本をふと思い出した。本書は信州望月の「職人館」で行われた対談などをまとめたものだ。職人館には何度かお世話になったことがある。この職人館の館主で「思想職人」の北沢正和さんから、農村や職人について話を聞いたことを思い出す。ここでは、第四話 思想職人の時代の宮本憲一先生の「レイバーからワークへ」を抜粋して紹介したい。



未来社会を考えてみると、二つの考え方がある。一つは、豊かな社会を求めて行く場合に、人間には余暇が必要だ。実際多くの人間が会社に雇用されていて、それでは自由がないので、余暇をできるだけ多くして行って、労働は出来るだけロボットを使ったりして簡略にする。労働時間を少なくして行って、その労働の時間以外に自由というか、あるいは人間性の回復を求めて行こうという考え方です。大量生産で画一的に技術の発展があれば、だんだん労働時間は短くなって行って、科学の成果というものが発揮され、自由時間でもって、豊かな世界の目安にするという考え方です。

ところが、他方で同じような、資本によって束縛された労働からの解放という考え方について、例えば、ラスキンとかモリスとかいう思想家は「仕事そのものの中に、喜びとか美を求めるべきであろう」としているんですね。労働から仕事へ、まあ英語でいうと、**Labor** から **Work** へと、変えていかなければならないのではないかってね。実際モリスは、言うだけじゃなくて、天才的な職人の仕事をやってのけたわけです。

つまり、近代、大量の労働者が排出されてきて、大工業制度が生まれ、それが労働組合を結成していく。そして、それが人類を解放していくという考え方と、そうではなくて労働そのものの中に、人間の解放を求めていこうということと、この二つの対抗関係が未だにずっとあるようなもんです。それで、今の世界は、モリス的な考え方というのを捨ててしまったわけですね。福祉国家だとか、あるいは日本の場合でも、戦後の高度成長の中でモリス的な考え方は、消滅させられた。

イギリスは、産業革命でムチャクチャな工業化と都市化が始まって、人類史上最初の人間破壊の時代があるんです。ところが、バーミンガムだけは都市政策をして、人間の生きている場所を改善しなくてはならないという動きがでてくるわけね。バーミンガムというのは、職人の町なんです。その地域に根ざしている職人の中から、こんな町ではいけない、こんな町にしていきたい。そういうので、バーミンガムの改革というのが起こるんです。将来を考えていく場合でも、そういう連綿たる職人の流れみたいなものがある、それをどう見ていくか、発展をするのかは、すごく興味があるところなんです。

(2023年2月16日)